

TOEIC Part5 対策を視野に入れた基礎英語文法指導

Teaching Basic English Grammar Keeping TOEIC Part5 in Mind

梅田 礼子*

Reiko Umeda

Summary

This is a revised edition of the manuscript which I handed in to the leader of the English department of Daido University in last March, as a reply to his request "Write a report on how to teach English Grammar so that our students can acquire enough skills and knowledge to get certain score in Part 5 of TOEIC Test." I, myself, am not quite happy about teaching only how to get a high score in TOEIC Test, as it is not what university education should put as a goal. However, as the society and the university require our students to get a high score on this test, and as teaching basics of English Grammar is important, I sorted out what is important for teachers in teaching basics of English Grammar. What counts most in teaching, in preparing for this part of the test, is to make learners' goal clear and teach only what they need, cutting out minute details and exceptions.

キーワード：基礎英文法、TOEIC Part 5、目標

Keywords：Basic English Grammar, TOEIC Part5, Goal

1. はじめに

この拙文は 2013 年 3 月 1 日に外国語教室主任からメールで以下のような指示を受け、筆者のこれまでの授業経験や各種書籍等を参考にまとめ原稿を加筆修正したものである。

「3 月下旬には、2 年生担当者には TOEIC の得点の向上の手法について本学の学生に対してはどのような学習ストラテジーを身につけさせるべきかについて、話し合っていたいただきたいと思っておりました。

TOEIC の Part 5 に対してどのような学習ストラテジーが本学の学生に対して有効なのかについて、まとめていただくことはできないでしょうか。英文法に関する学習ストラテジーの先行研究に準拠して、それを本学の学生バージョンに改めていくということを次年度

に向けて行っていきたいと考えていますので、それを意識して、まとめていただければと思います」

筆者はテーマとして特に TOEIC 対策を研究しているわけではないが、これまで本学で 10 年間、主に 1 年の英文法、総合英語、2 年の多元英語検定コースを担当してきた経験と、各種参考書や問題集、対策本などからの知識、受験してみた体験などから気が付いた点などをまとめてみた。参考になれば幸いである。

2. 英語基礎力徹底の重要性

TOEIC や英検など「英語の試験」でも、運転免許試験などその他のような試験でも、試験の特徴や出題傾向をつかみ、受験対策をすることで、ある程度点数はアップする。しかし、基礎知識がないことには、受

* 大同大学教養部外国語教室

験テクニックだけで中～高得点は望めない。「英語の試験」を受験する必要のある学生は、まずは「自分の英語基礎力の向上」を図り、そのうえで「受験対策」をする、ということをしっかり分けて認識しないとイケない。言い換えれば、王道+技、である。王道なしでは話にならないが、専用の対策も必要。

(1) 英語基礎力徹底向上 + 受験対策 王道 技

2.1 英語基礎力

「英語の力」には読む・聞く・書く・話すと4つの側面がある。読む・聞くを「受信力」、書く・話すを「発信力」としよう（以下、順にR,L,W,S）。TOEICではL,Rを問えば基礎力の測定ができるだろうという前提でL,Rのみである。S,WについてはSWテストが別にある。つまり、「発信力」は「受信力」がなければできない、という前提である。

これは世間でよく言われる学校教育への不満「中高6年間英語を習って、読むのはなんとかできるが、話せない」という言い方とも合致する。（ただ、現実には英文をある程度の速度で正確に「読める」人も少ないのであるが。）

そこで、学校教育でも「R,L」が中心になるが、Lを鍛えるためにも、実はSも基礎的なことは練習に取り入れたいところである。（自由に「話す」という域まで行く、もっと手前の、「例文を発音してみる」程度で構わないので、授業時には学習者が実際に英文を発音してみる時間を入れたい。言語は「使う」ものである。（実践的な意味で言えば、Lを鍛えるためにも発話してみることは大切。TOEIC対策としても音韻変化など学習したうでの発音練習は大切であろう。）また、言語獲得の順としては「話す」が先で、文字がなくても話すことはできる。その意味では「話す」も基本である。）

2.2 学習側面

学習する側面として見ると、上記R,L,W,Sの4技能を支えるものとして、文法と語彙がさらに加わる。

2.2.1 文法学習の重要性

語彙については多くの人がある重要性を認識しているようだが、文法については毛嫌いしたり、「文法ばかりやっているから日本人は英語が話せないのだ」と批判したりする人が多い。大学教員の中にも、多読を推奨するあまり、「多読だけやっていたら赤ちゃんが言葉を覚えるように楽しく楽に英語が身につく。文法は要らない」とまで言ってしまった人もいる¹⁾。実はこれは全く不親切だ。母語と違い、成人学習者が外国語を学習する場合は、文法をまず一通り学習する方がその言語の仕組みが見えて、有効な学習法である。文法嫌い、

また文法不要論者が気づいていない（あるいは伏せている？）のは、「文法は閉じた集合である」という点である。

それに比べ語彙は「開いた集合」である。身の回りの名詞や基礎的な動詞から習い始め、少しずつ難しい語や頻度の少ない語、と学習は進み、さらに分野ごとによく使う語彙もある。また、学習している間にもどんどん新語もできる。語彙の学習は英語の学習の中で最もゴールが見えにくく、長い道のりである。英語学習で挫折する人の多くはこの語彙の学習の地道さ、ゴールの見えなさに挫折するのではないだろうか。

一方、文法は閉じた集合である。基礎だけに絞れば、よくある大学英文法教科書が20レッスンや24レッスンで組んであるように、せいぜい20～30個程度のルールしかないのである。ゴールは実は見えているのだ。なのに、前述のように、入門期にあまりに詳細な学習をしてしまうと、終わりがなく錯覚してしまう。

嫌われがちな文法だが、実は閉じた集合であり、これをさっと先に基礎だけを一通りやっしまえば、英語の仕組み全体が見え、ほかの学習もしやすくなる、便利なものなのだ。このことをまず教員は学習者に伝えてやるべきだろう。そして、つついいろいろ盛り込んで教えたくなるのを我慢し、基礎中の基礎だけに絞って1周目を教えるのが大切だ。（たとえば、完了を教える際に、現在完了は教えるが、未来完了は思い切って削る、過去完了は学習者の理解度を見て可能そうな場合に限り導入する、など。基本概念の理解が大事なのであって、使用頻度の少ない項目は思い切って削り、基本の徹底に時間をかけるべきである。）

3. 目的地の設定と学習項目・程度の整理

3.1 目的地の設定

仕事や生きていくうえで英語を必要としない人が海外旅行に行き、レストランで料理の注文を聞かれて困ったときには「モア・スロウ、プリーズ」でも通じうるし、用は足りるだろう。しかし、仕事で必要な人ならもう少し正確に話したり、聞き取ったりする必要がある。日本人で英語学習の挫折者が多いのは、最初に目的地の設定をきちんとせずになんとなく「英語ができるといいなあ」「英語がペラペラだとかっこいいなあ」程度で会話学校に通い始めたりするからである。まず、各自、「どの程度の英語力を目標とするのか」、目的地をしつかりと見極めることが大切である。

なんとなく「英語がペラペラに」と考える人が多いが、頭の中で日本語から作文せず英語を英語のまま流

暢に話せる、というのはかなり高い目標であり、そこに至るには多大な学習時間（特に語彙の学習）を要する。日本で特に英語を使う必要のない仕事をして暮らす人の多くには、そこまでの英語力は必要ではない。また、英語を使う人たちと対面で交流する必要があるのか、メールなどでの交流で、辞書などを使って作文する時間があるのか、という使う場面の違いも考慮する必要がある。

日本人全員が流暢に英語を駆使できる必要はない。繰り返すが、各自「どの程度の英語力が必要なのか」目的地をしっかりと見極めることが大切である。

3.2 学習項目・程度の整理

前述のように、日本人全員が流暢に英語を駆使できる必要はない。仕事で使うと言っても、工場で外国人労働者に機械の使い方を説明する程度なら、少しの学習で用が足りる。また、翻訳ソフトや辞書、通訳を使うという選択肢もある。中途半端な英語力でビジネス上誤解が生じてトラブルとなるなら通訳を雇う方が安いだろう。なので、まずは、本当に英語が必要なのか、必要ならどの程度か、を見極めるべきである。英語が流暢にほとんど苦痛なく駆使できるというレベルに達するには相当の時間・労力・資金（本、辞書、教材代など）を要する。それらを本当に使うべきか？それだけの恐ろしいほど多くの時間は実は仕事の他の技能の習得に使うべきかもしれない。そうした無駄足を踏まないことが大切である。多くの日本人にとって、学校の単位のため、就職のため、仕事で少しだけ使うため、には英語は実は「そこそこ」できれば十分なのである。なので、さっさと「そこそこ」の力をつけて、会社でTOEICの試験を受けさせられるなら受け、700点くらい取って、報奨金をもらえばよい。900点取る必要のある会社などめったにないのだから。そして、流暢に駆使できるレベル、までは道のりは長い、「そこそこ」でよい、となればさほど長くも険しくもない道である。

本学の学生も卒業後の進路、希望する道によって、英語の必要度は様々なはずである。まずは英語が必要かどうか、必要ならどの程度必要なのか、をしっかりと見極め、無駄な勉強をしないことも大切である。

誤解をしないでいただきたい。本来勉強に「無駄」はない。だが、4年間、実質的には就職活動するまでの3年数か月間でどれだけ力をつけなくては行けないか、を考える場合、必要以上に詳細な文法知識や、めったに使用しない難しい語彙などはこの際「無駄」と割り切らなくてはならない。そうしないと、肝心の「基礎」すら身につかないことになる。

例えば、冠詞について多くの教科書や参考書は a と the の様々な例を挙げ、さらにいくつもの「例外」を後

に出している。これでは学習者はいったい何を覚えてよいかわからない。そのような細かな知識は、必要性に応じて文法書を3周目、4周目と学習する初級から中級のときに読んで仕入れればよい。入門期の1周目には必要でないどころか、邪魔である。教員は往々にしてこうした細かな知識や例外を教えたがるので、注意しなくてはならない。冠詞について、入門期では、「話し手・聞き手にとって、ああ、あれのことだ、とわかるものは the、いっぱいあるうちのどれでもいいから選んだ一つ、は a」このルールだけでよい。これで「太陽」が the なのも、文章に初めて出てくる、「昨日買った自転車」の「サドルの色」を言う時に the なのも、説明ができる。

これは主に教える側にとって注意が必要な点だろう。学習者は無駄な勉強はしない。無駄なことは覚えない。教える側は何が無駄かを見極め、入門者に本当に必要な基礎のみを教える。思い切って無駄は削る。

4. TOEIC 全体の特徴

4.1 時間との戦い、事務処理能力

受験した回が違っても点数比較ができるように、問題数が相当多い。2時間でリスニング100問(45分)、リーディング100問(75分)に解答しなければならず、時間との戦いである。ほとんどの受験者は最後まで目を通さないうちに時間切れとなる。英語力が相当あっても、事務処理能力*が低ければ、高得点が取れない可能性がある。(* さっと時間配分を考えられる、テキパキマークをする、リスニングの指示文が流れている間や、選択肢のうち正解が1、2などの場合余る時間ができればすぐに先の問題や選択肢を見ておく、リーディングでは問題文をさっと見て、答が本文のどこに書いてあるかスキミングして見つける、などの能力。)

また、性格も影響するかもしれない。「全部の意味が分からないと落ち着かない」という人は要注意。正解して点を取ることが目的なので、1つの文の全体の意味が分からなくても解答が決まればそこで次に進まねばならない。文法空所補充では空所の前後を見れば答えが分かることが多い。長文でも、すべてを読む必要はほとんどない。その点の割り切りができないといけない。さらに、集中力や体力も必要である。休憩なしで2時間ほとんどずっと集中していなければ高得点は取れない。

こうした特徴があるので、テキパキと解答し、進めていくコツを「受験対策」として特別に勉強する必要がある。うっとうしいのだが、逆に言えば、それをす

るだけで 50~100 点は稼げるので、手を抜いてはいけない。

4.2 ビジネスがらみの用語や表現

「受験対策」が必要な面が、先の 4.1 に加え、TOEIC ではビジネスがらみの用語や表現が多いという点である。中高大学での英語学習では一般的な語彙が中心なので、中高大学での英語学習のみで TOEIC に挑戦したら、初めて見る単語が続出ということになる。

将来就職してから英語を使う仕事はしないのに、そのような学習は無駄だ、という人もあるだろう。全体の特徴として語彙そのものを問う問題はさほど多くないので、目標が 500~600 点台ならば語彙問題は捨てる、と割り切るのも一つの手だろう。もう少し高得点を狙うなら、出てくる語彙もある程度の傾向はあるので、傾向を踏まえた受験勉強をすれば少しでも点数アップが狙える。(たとえば会社関係の用語では部署名、役職名、ビジネスメモやメールの定番用語、給与関係の用語など。)

5. TOEIC 特に Part5 の特徴

5.1 Part5 の特徴

1 つの短文中 1 か所が抜いてあり、適語を選択肢から選ぶパート。問われるのは文法知識と語彙知識。このうち、文法は閉じた集合であるので、しっかり学習していれば実はこのパートは点の取りどころである。TOEIC 全体の中でも、一番時間が節約できるパートであるので、ここで文章を読まずに解答に必要な個所だけをさっと見つけて 2~20 秒くらいで解答できるようにすれば、他のパートに時間をかけられる。TOEIC 攻略のカギ、と言われる所以である。また、基礎力向上という点からも、ここで問われるような基礎的文法事項はやはり身に付けておきたいものであるし、その基礎力がパート 7 の読解やリスニングにも生きてくる。(リスニングについてはここでは述べないが、「リスニング力」だけ、ではだめで、語彙力、そして実は文法力が大切である。聞こえにくかったところも文法力で推測できることが多いのである。)

特によく出る品詞の問題などはラッキーで、空所の前後と選択肢を見ただけで、解答できてしまうものも多い。早ければ 2 秒で正解が決まる。

例えば次のような問題である。

(2) Mr. Irwin called the hotel to request the of his room reservation for July 10.

(A) cancel

(B) cancellation

(C) cancelled

(D) cancels

実際にはもう少し修飾部がついたりして長い文にしてあることが多いが、問うていることは結局は品詞であり、ここでは the がついていて、後ろは of なのだから「名詞」が来るはずだ、と分かれば、まったく文の意味は考えずに B が 2 秒程で選べる。逆に言えば、この問題に 10 秒も 20 秒もかけてはいけない。文全体の意味を分かろうとしてはいけないのである。学習ではなく「テスト」なので、そこは割り切って、次に進まなければならない。

実はこの Part 5 はこのように、空所の前後を見るだけで解答ができる問題が多いので、点の稼ぎどころである。また、よく出る文法項目には後述のように傾向があるので、事前の対策も行いやすく、最も時間をかけて学習すべきところである。

一方、語彙については、純粹に意味の違いのみを問う場合は「知らなければお手上げ」で、文法に比べ点数を落としやすい。ただ、傾向としては 40 問中語彙の問題 12 問程度²⁾で、文法問題の方が 28 問程度と多い。語彙力が不足している受験者の場合、そうした受験者は 800 点などの高得点を狙っているはずもないので、さっさとあきらめてカンでマークして次に進むべき。目標に応じた割り切りが必要だろう。高得点を狙う受験者は文法問題で浮かせた時間を語彙問題に使えばよい。

5.2 語彙問題・語彙の指導について

本レポートを命じられた目的が「本学の学生にとってどのような学習が必要か」ということと思われる。本学の学生が TOEIC を受ける際には文法の基礎を固めておくことが戦略となりうる。語彙を戦力とするにはそれより多大な時間がかかるので、今回は語彙の学習については詳細を述べない。筆者自身、主に文法の授業を長年担当しており、文法についてはある程度の重要度の違いを認識しているが、語彙についてそれと同程度の知見はない。もちろん、授業で大学テキスト 1 冊を通して学習させる中でも TOEIC によく出る語彙というのはあるので、授業ではその中でも特に基本として覚えたいもの、そうでないもの、は分けて注意を喚起してはいるが。本学学生への語彙指導としては、難しい語彙を多く覚えさせることよりも、基本語彙に絞って覚えさせることと、TOEIC のこのパートでも問われる語法、特にコロケーションについてしっかり定着させることが大切だろう。例えば、「profit=収益」とだけ覚えても、実際運用ができない。make large profits などと make という動詞とよく使われる、ということも併せて覚えないと意味がなくなってしまう。語彙指導をする場合は遠回りに見えても例文の中で覚えさせる

ことが重要である。

5.3 Part5 文法問題の傾向

資料を参照していただきたいが、文法問題については頻出項目がかなり傾向としてわかっている。

1) 石井 (2007) では多い順に次のように分類している。

派生形 (Part5 の 20%)、動詞の形 (15%)、接続詞・関係詞 (10%)、前置詞 (5%)、代名詞 (5%)、冠詞・数量詞 (5%)、形容詞・副詞 (5%)

2) TOEIC を毎回受験して傾向を分析、指導する TOEIC 特化型スクールを運営しているという花田氏 (2010, 2012) は出題の多い順に次のように項目を挙げている。

品詞、語法、前置詞 VS 接続詞、文脈、時制、態、修飾 (other, each, already など)、構文、格、他動詞 VS 自動詞、主述の一致、関係詞、比較、等位接続、指示語

3) 早川 (2011, 2012) では p.13 で出題パターンを以下のように挙げている。(パート5 は 40 問)

品詞 10 問程度、動詞の形 3 問程度、接続詞・前置詞 3 問程度、代名詞 2 問程度、前置詞 3 問程度、語彙 16 問程度、その他 3 問程度。

この 3 種で多少順や数にわずかな差はあるが、だいたい一致している。つまり、TOEIC テスト全体の中でも、最も準備がしやすい部分である。そして、これらのほとんどは中高の英語の授業で習うものであり、決して特殊な、難しい事項や新しい事項ではない。実際、中学 1・2 年で習う「主語と動詞の一致」という問題も出題されるのである。なので、決していわゆる、よく批判される「学校英語」が悪い、とか無駄、というのではない。中高で学習する文法の基礎はやはり大切であり、この力を抜きにして、TOEIC である程度の点数は目指せない。

ただ、問うている事項は時に驚くべき基本的なことなのだが、TOEIC では主語に修飾部をつけて長くする、関係詞を文中に挟む、などして文を複雑にし、基本事項が見えにくくしてあることが多い。例えば次のような出題である。(本番の問題はもっと長かったり、ビジネス系の見慣れぬ語彙が入ったりしてさらに複雑。選択肢ももう少し紛らわしい。)

(3) The man who is standing over there with three children _____ my uncle.

(A) are (B) is (C) will (D) be

これは骨だけを取り出せば、The man _____ my uncle. であり、これが見えれば(B) is は中学 1 年生でも選べる。

このように、パート5 の文法問題では、余計な修飾部をそぎ落とし、難しい語彙は気にせず、まず空所の前後を見て、何を問うている問題か見極めることが

大切である。

前述の項目ごとによく出る事項もさらにあるが、これら詳細はこのレポートの目的ではないので、割愛する。それらについては TOEIC を専門的に分析している様々な方々が参考書・問題集を出しているの、学生も参考にするとよいだろう。

なお、本学の学生のように、目標が 500 点辺りの場合、上記三者が挙げているような頻出の基本事項に絞って学習するのが得策である。例えば仮定法などは英文法としては重要かもしれないし、TOEIC で出題されることもあるが、まず 500 点が目標という受験者はそのようなあまり出題頻度の高くない項目は切り捨てて、基本事項、特に品詞、動詞の形 (数、時制の一致なども含め)、接続詞、関係詞、前置詞などをまず徹底して身につけるべきである。

5.4 その他受験対策で注意すべき点

5.4.1 目標スコアに応じた教材、勉強法

500 点を目指す学習者と 800 点を目指す学習者では学習すべき事項、広さ・深さも異なり、学習法や教材も異なる。不要に難しい教材を使っても挫折するだけでなく、無駄が多い。目標スコアに応じた教材・勉強法を取るのも大切な受験対策である。

5.4.2 「間違えてもよい幅」を知る

高橋 (2011) では、目標スコアに応じて、どのくらいの正答数を目標せばよいか、裏返せば、「どのくらい落としてもいいか」を挙げている。500 点や 600 点取るのに、英字新聞を読んで訓練したり、映画の英語が 8 割方聴き取れなければだめだ、などということはない。そのような (TOEIC での点数確保にとって) 「無駄な勉強」をしないよう説いている。参考までに、600 点目標の場合、目標正答数は 200 問中 122 問、半分と少し、でよいのである。(その代り、一定数について確実に正答することが肝要。)パート5 では 40 問中 28 問でよい。半分以上ではあるが、30 問でなくてもよいのである。学生も教員側もこうした受験対策上必要な情報を知っておいて損はない。(筆者個人としては大学という機関が特定の外部の試験について受験対策的な授業 (のみ) を行うことは大学の存在意義と合致しないと感じるが、大学側からの要請があり、ある程度行わなければならないということであれば、学生にとっても教員にとっても効率よく学習・指導を行う方がよいと考える。)

6. 文法力をつけるための学習、また教授法

これまでの文章中でも少し述べたが、文法力は英語力の基礎であり、また、閉じた集合であって、実は学習しやすいところである。ただ、これまでの中高、そ

して大学の英文法の授業では、教員がなるべくたくさん、そして詳しく教えようとする傾向があり、学習者がそれによって混乱してしまい、結局基本事項もおぼつかない、ということがあるように思われる。学習者も、だが、教員側が基本事項を絞ることがまず大切である。応用的な事柄は学習が進み、力がついてきた段階で増やしていけばよい。これは TOEIC 対策ということに限らず、である。

6.1 基本に絞って学習/教える

3.2 節で a の the の例を挙げ、時に教員・教科書・参考書は細かな例や例外事項を挙げることに懸命になり、肝心の「その文法事項の基礎、骨」を見えにくくするきらいがある、と指摘した。同様の事をもう少し例を挙げておく。このようなことが様々な文法事項広範にわたっているとしたら、本学の学生の大半である、英語の苦手な学習者・嫌いな学習者にとっては文法学習は苦痛でしかない。

①動詞が目的語に動名詞を取るか、不定詞を取るかの指導。

不定詞、動名詞と指導した後、次に出てくるのがこの問題である。多くの教科書がただ実例を羅列している。これでは暗記の得意な学習者は良いが、そうでない学習者はうんざりしてしまう。暗記法として塚田・高橋・Yamada (2011) では「動詞+ing は『megafeps メガフェプス daci ダシ』を覚えよ」としている。「動名詞を目的語にとる動詞は megafeps (メガフェプス)、mind, enjoy, give up, avoid, finish, escape, postpone, suggest が基本。これに daci (ダシ)、deny, admit, consider, include を加えて覚えよう」というわけだ。admit, avoid... とアルファベット順に羅列しているテキスト・参考書よりは親切だが、もっと効率的な覚え方がある。

すべてに言えるわけではないが、およその動詞が「これからのことは to do、すでに起きたことは-ing」というルールで判別できる。不定詞を取るのは hope, want などが代表的、動名詞を取るのは enjoy, finish などが代表的だ。「期待する」のはこれからのこと、「楽しんだ」「終えた」などはすでに起きたこと、だ。さらに、2つの事項なので、どちらがどちらだったか、覚えやすいように、筆者は覚えるヒントとして授業では to do の to は前置詞でもおなじみ、「～へ (向かう)」という方向性を表す、と説明し、黒板に→を描く。場所・空間についても言えるし、そこから発展して時についても言うようになった。だからこれからの事を表す、と付け足す。もちろん、このヒントで覚えやすい者は採用し、かえって紛らわしいと感じる者は採用しなくてよい。例えば I hope to see you again. など基本例文を覚えれば、他の動詞も類推できる。「これからのことは to do、すでにお

きたことは-ing」というルールがすべての動詞に使えて、綺麗に全部判別できるわけではないが、大半の動詞がこれで区別できるなら、このルールを教える方が親切だろう。

②動詞の分詞-ed と-ing の話

これは TOEIC にもよく出る項目であるが、TOEIC に出るから、というよりむしろ英文法の基本として身につけさせたい項目である。

これも前項①のように、筆者はなじみのある実例と簡単な説明でまず講義し、後の授業でもこの例が出てくるたびに一言復習コメントを入れるようにしている。説明としては、「～する側は-ing、～された側は-ed」というシンプルなものである。対象者によっては「現在分詞」「過去分詞」という用語も与えない。(学習者の目標レベルによって、「無駄」を省き、基礎を徹底する。) 例としては interest か excite を用いる。これは学生が interesting, exciting という形容詞はすでに知っていると思われるからだ。(少なくとも「エキサイティング」というカタカナ語は知っている。) The book interested the readers. という文で、主語と目的語の関係、動詞の使い方(方向性)を説明し、する側は an interesting book と-ing、～された側は the interested readers と-edになる、とだけ説明する。覚えるヒントとしては、-ing について形容詞としてなじみがある者はそちらで、なじみがないなら、「受動態にも-ed が出てきた、『～られ』ということで通じている」という点を挙げる。2項目あるから、どちらか一方をしっかりと覚え、もう一つは「違う方」と覚えればよい、ということも指摘する。2つ覚えようとして覚えきれない学生、逆に覚えてしまう学生は本学では案外多いと思われるので。このような学生には「覚えなさい」という指導では不足している。暗記が苦手な学生には「覚え方のコツ」も指導してやらねばならない。

この他、前述の冠詞の説明や、some と any の使い分け、関係代名詞の説明などについても、極力最初の説明は簡単にし、それ以後例文が出てくるたびに軽く復習をして反復させることで知識の定着を試みている。

6.2 縦糸と横糸 学習事項の系統立った復習

もう一つ学習・指導において重要な点は、「学習した事項を系統立てて整理し直してみる」こと、である。

英文法の教科書はほとんどが項目別になっており、順に、～は名詞、～は形容詞、～は副詞、などと習う。いわば、次々と横糸ばかりが並ぶ。その後、「では形容詞ってどんな形が多いの?」「-ly がつけばたいはいは副詞」など縦糸を通す作業をして整理・確認することが必要だ。従来の学校英語教育(大学も含め)では、この作業する時間までなかなか取れないで、事項の羅列、

横糸だらけになっていたのではないだろうか。

筆者が特に現カリキュラムの2年生「多元英語検定コース」で強調して行っている説明を以下に挙げる。

①動詞の見つけ方のコツ

中学でbeを習い、go, haveなど基本的な動詞を習い、次第に動詞の数が増えたり、時制について学習したり、と横糸が積み重なっていく。しかし、大学生でも簡単な英文の主語と動詞を指摘しなさいと言われて、見つけられないケースがある。これは「縦糸」を通すことで、かなり訓練できる。すなわち、「動詞を見つけるコツ」を学習・指導することだ。「動詞を見つけると言われても自分は語彙も少ないし、どれが動詞かなんてわからない」という学生の言い訳が聞こえるが、語彙力がさほどなくても、また、実際にその動詞を知らなくても、それが動詞であると見つけるコツはある。つまり、「-sがついていれば動詞の三単現の-sか、名詞の複数形なのだから、動詞の可能性がある」、「willやcanの後は動詞が来る(副詞を挟む場合もあるが)」といった、見つけるコツを指導してやる必要がある。これは従来の教科書や参考書にはなかなか記述が無い点である。大学受験指導でコツとして披露していそうなことであるが、通常の学校教育でもぜひ指導すべきであると考ええる。

②長文読解では特にandに注目

接続詞andについては、文法の時間に「等位接続詞です」と習うが、そのような術語を覚えることに実質的なメリットはさほどない。むしろ、それがどういうことを意味しているか、を実例の中で指導してやるのが大切である。筆者の授業(特に「多元英語検定コース」)では、特に長文読解の際に「andが出たら両辺を探せ」をルールとして、ほぼ通年注意を喚起し続けている。英文を訳す際に、前から知らない単語は辞書を引き、辞書に出た一番目の訳語をつなげるだけで、構造を読み取ることをしていないので、間違った訳をして平然としている学生が多い。例えば、I went to ABC shopping center and bought a bag last weekを「私は先週ABCショッピングセンターに行った、そしてかばんを買う」などとするようなミスである。(bought以下の部分の主語もIである、andがwent to...とbought...という二つの動詞句を結んでいる、last weekも全文に共通である、ということを見落とし、前半だけにIとlast weekをくっつけて訳してしまう。)こうしたミスを防ぐために、「構造、骨組文(筆者造語)を読み取る」ことの大切さを強調し、その一つとして、長文に実はかなり頻繁に出るandについて「andが出たら両辺を探せ」を標語のようにしつこく繰り返している。さらに、そのandのルールを覚えやすいように、数学の式(a+b)xを挙げ、

「bxは忘れないが、axをかけ忘れる人が多い、遠いから見えにくくて忘れがち」という説明も補足する。英語は苦手だが数学は得意、という学生も多いので、この説明はなじみやすいようである。

6.3 構造の読み取りに記号式

英文に主語と述語の間にスラッシュ(/)を入れる、節の固まりは[]で、句の固まりは()で区切る、修飾部は()でまずくくってしまう、など記号を入れさせて、英文の構造、「骨」を見えやすくするよう指導している。こうすることで、ただ前から訳して構造を読み違える、とか、語句を読み飛ばして訳してしまう、などのミスを防ぐことができ、正確に読めるようになる。(これは筆者が中学の頃から行っていたことだが、かなり有効である。音読にもチャンクが意識できるので役立つ。音読用にさらにここに強弱マークやイントネーションマークを入れて練習していた。こうした訓練もぜひ少しの時間でもよいから大学の授業でも取り入れてやりたいものである。)

6.4 反復学習

習ったことを整理して覚える、そして忘れない。忘れないためには反復が必要。同じこと(語彙、文法項目)を何度も復習する反復と、同じ項目を意識しながら、その後の読解課題などにも取り組んで反復する、と二種ある。どちらも重要で、学期内、通年、また数年間、指導し続けることが大切。もちろん、そうする過程で学習者が自律的学習者となっていくことも狙いたい。

7. おわりに

本稿は2013年3月に外国語教室主任より命を受けて、TOEICパート5の問題での得点力を上げさせる指導について書いたものである。しかし、筆者は途中5.4.2節で述べたように、「大学という機関が特定の外部の試験について受験対策的な授業(のみ)を行うことは大学の存在意義と合致しない」と感じている。外部の、しかもアメリカ主導の試験ということであれば、ビジネス用語が多く、事務処理能力も多分に問われることになるTOEICよりも、学習内容をまとめる力などを問う、留学用のTOEFLの方が試験としては日本の大学生には向いていると考える。(ただし、TOEFLはアメリカの大学に留学する際に用いられる基準であり、要求度が高いため、試験としての難易度は高い。だが、用いられる題材はアメリカの一般教養的な講義の内容であり、TOEICのビジネス用語のような偏りが無い。)

しかし、近年、企業側が試験として点数が出て指標にしやすいTOEICをよく利用し、また、TOEICで得点

できるような英語力を身につけさせることを大学側に要求してきている。「深い教養と知識を身につけ、社会に出てから応用できる基礎力を養う」という大学本来の目的から、実利的な目的へと社会の要請が移行してきている。大学としては実利一辺倒にならないよう、抵抗すべきと考えるが、卒業し就職する学生にとって、即戦力が身につけていないために就職できない、となってはそれも困る。社会からの要請があり、ある程度行わなければならないということであれば、学生にとっても教員にとっても効率よく学習・指導を行う方がよいと考えているのみである。決して TOEIC という試験自体や、TOEIC を信奉するような社会風潮を絶賛するものではない。学習の目安としてこのようなテストを時々受験するのは良いが、学校教育においてテスト自体が目的となるのはおかしい。必要な者が受験すればよいことである。(また、基礎力が無くては TOEIC で高得点が取れないことは確かだが、逆は真ならず、である。つまり、TOEIC で高得点が取れたからといって必ずしも高度なビジネスコミュニケーションができるとは限らない点にも注意は必要だろう。)

本来、大学教育は学生が少し自学自習(受験対策)すればそのような外部試験にも対応できるような豊かな基礎力を養うことがその使命と考える。教員も学生も世間の噂などに振り回されることなく、まずは着実な英語基礎力をつけること、つけさせることを主眼としたものである。

注

1. 酒井邦秀氏は「多読」を世間に広めた功労者であるが、多読が流行して勢いづいたのか、「多読をやっていれば文法も語彙も力が付く」「学校英語は不要」という趣旨の発言があった。多読を世に広めるきっかけとなった「快読 100 万語！ペーパーバックへの道」(2002)は多読の仕方、段階ごとの注意点やおすすめ本などを挙げた良書であるが、後半で「学校英語」の批判をしている。「学校英語」では **and** や **the** についての説明が不正確または不十分である、という指摘は正しいが、それを根拠に「学校英語は音についても、語についても、文法についても大変な誤解をしていて、使いものにならない。学校英語は捨てるしかありません。さっぱり捨てて、幼児に戻って絵本を読んでいくことが、結局 100 万語の頂に到達するいちばん早い道なのです」(p. 292)と結論付けるのは早計だろう。学校英語教育での文法の説明や扱う文法項目は確かに改善の余地がある。また、発音指導や発話訓練、作文練習などが不足していることも学校英語教育で改善すべ

き点であるだろう。しかし、かといって全否定して「文法学習は不要」とするのは行き過ぎである。大人の学習者の場合、大方の文法項目に出会うまで長々と絵本や簡単な洋書を読むよりは、閉じた集合である文法の基本項目だけをさっと学習した方が学習の効率が良い。

2. 高橋・塚田・DeVos、2010 年、P.10 「Part 5 には、『文法知識』と『語彙知識』を問う 2 パターンの設問があります。40 問のうち 12 問前後が『語彙』、残りが『文法』を問う問題です。」

引用文献

- 1) 石井隆之、2006、2007、新 TOEIC テスト攻略法が分かる！、実務教育出版。
- 2) 酒井邦秀、2002、快読 100 万語！ペーパーバックへの道、筑摩書房。
- 3) 高橋基治、2011、TOEIC®テスト ムダな勉強はやめなさい！：がんばっているのにスコアが伸びない人のための最速最短学習法、小学館。
- 4) 高橋基治・塚田幸光・James DeVos、2010、2012、TOEIC®テスト Part 5 & 6 を 1 問 20 秒で解けるようになる本、小学館。
- 5) 塚田幸光・高橋基治・Nobu Yamada、2011、TOEIC テスト 10 秒ルール 文法・語彙、学研教育出版。
- 6) 花田徹也、2010、2012、新 TOEIC TEST 文法特急 2 急所アタック編、朝日新聞出版。
- 7) 早川幸治、2011、2012、Mastery Drills for the TOEIC TEST ALL in one (TOEIC テストマスタードリル全パート入門編)、桐原書店。(25 年度 2 年生テキスト)

参考文献

- 1) 小石裕子、2006、新 TOEIC TEST 英文法出るとこだけ！直前 5 日間で 100 点差がつく鉄則 27、アルク。
- 2) 中村澄子、2005、1 日 1 分レッスン！TOEIC TEST 一時間のないあなたに！即効 250 点 up、祥伝社黄金文庫。
- 3) 中村澄子、2006、1 日 1 分レッスン！TOEIC TEST パワーアップ編、祥伝社黄金文庫。
- 4) 中村澄子、2007、1 日 1 分レッスン！新 TOEIC TEST、祥伝社黄金文庫。
- 5) 花田徹也、2009、1 駅 1 題新 TOEIC TEST 文法特急、朝日新聞出版。
- 6) 宮野智晴・ジョセフ・ルリアス、2010、TOEIC TEST PART5 文法・語彙問題だけで 100 点アップ(すぐ効くシリーズ)、アスク出版。
- 7) 宮野智晴・ジョセフ・ルリアス、2012、新 TOEIC テスト 文法問題は 20 秒で解ける！、アスク出版。

- 8) Educational Testing Service, 国際ビジネスコミュニケーション協会、2012、TOEIC テスト新公式問題集 VOL. 5、国際ビジネスコミュニケーション協会.